von Mayr: Statistik und Gesellschaftslehre, Bd. II, 2 te Aufl., 1926, SS. 9-10.

(4) 人口学の見地からは、自ら問題は別である。

(5) ここにいう地域は、理論上、人口学、或いは、人類生態学を始め他の社会科学によつて規定された実質的地域〔substantive areas〕を指す。

(6) 例えば、

U. N. Economic and Social Council: Findings of Studies on the Relationships between Population Trends and Economic and Social Factors—Population Commission, 1st session—22 May—2 June 1950. Item 5 of the Provisional Agenda. また、国連経済社会理事会、統計委員会及び人口委員会に提出された『人口動態記録及び統計の諸基準案』は添附資料第一号中、『人口動態統計の利用』に関して次のごとく指摘している。すなわち、『人口動態統計利用のうちで最も重要なものの一つは、経済的社会的目的による人口の人口学的分析におけるその機能であるといいえよう。一つの人口の人口学的現状の分析並びに人口の大きさ、構造、地域的分布及び健康状態による将来人口増加の分析は、その人口の経済的、社会的生活を規定する上に最も重要なものであり、その人口の内面において働く出生率、結婚率、死亡率の研究に基かなければならない。』『公衆衛生及び医学的諸計画の発展、企画、実施及び評価に関係を有つ公衆衛生諸機関の行政上及び研究上の要求は人口動態統計の一般的な経済的、社会的利用と相関連する。』と。——訳文は統計委員会事務局訳による。ただし、若干の用語を私の用語におきかえた。——U. N. Economic and Social Council: Proposed Standards for Vital Records and Statistics—Statistical Commission 6th Session, Population Commission 6th Session, 22 March 1951, Annex I.

(7) 例えば、北川敏男博士は次のごとく指摘される。『人口統計学に於いても、社会の階級的構成と階級的相互関係の動態とに関しては、統計調査が今日尚未だ不充分であるように思はれる。抽象的に等質的な一個の人間と見立てて、人間の数を算へ上げることに余りにも興味をもち、行政区劃別の分類に余りに拘束され過ぎてゐるのではなかろうか。これは或る意味では先科学的態度であると共に、又他の意味ではそれはそれ自身一つの立場、理論的規定を意味することが改めて指摘されねばならないであろう。』——北川敏男　統計学の認識—統計学の基盤と方法—昭和二十三年　二〇二頁。

(8) イギリス統計委員会のイギリス人口委員会に対する報告書は以上の傾向をよく現わしていると思われる。なお、参照。館　稔　最近アメリカにおける人口の研究　毎日新聞社人口問題調査会資料第二四号　昭和二十六年。

"cohort" という言葉（うめ草）

近頃、人口学や人口統計学で "cohort" という言葉がよく使われる。ちょっと意味の捕えにくい言葉である。辞書でみると、これは、古代ローマの軍団 "legion" の十個の区分の一たる歩兵部隊で、最初は三〇〇人、後に五〇〇人ないし六〇〇人の歩兵をもつて編成されていたということである。また、古くは、博物分類学上、『区』に当る分類部門として使われたこともあるという〔Webster's New International Dictionary of the English Language, 2nd ed., 1934〕。転じて、人口統計学では、"cohort" は "generation" と同義であるとされるのが一般である〔例えば、L.I. Dublin, A.J. Lotka, M. Spiegelman: Length of Life, rev. ed., 1949, p. 174〕。"generation" の概念は、社会学などでは、学者によつていろいろに規定されていて困難な概念の一であるが、人口統計学では、つとに、概ねその概念は確立されている。Dr. Irene B. Taeuber は、かつて、私に "cohort" を説明して "$l(x)$ in the life table" だといわれた。私はこれは非常にうまい説明だと思つた。結局、私は、"cohort" は人口統計学上の "Generation" と同義であつて、少し意を盡さないところはあるが、『同時出生集団』といつてよいのではないかと思う〔館　稔　人口統計学講義要綱　再版　昭和二十六年　一一一頁〕。（館　稔）